

対話・協同が求められるこれからの科学技術の世界で

校長 辻 浩

現在、日本の科学技術政策は「第5期科学技術基本計画 (society 5.0)」にもとづいて推進されている。その特徴は、現実空間 (フィジカル空間) と仮想空間 (サイバー空間) を融合させて、経済を発展させるとともに社会的課題の解決をはかることにある。

ここでは、society 4.0で実現した情報社会をより高度化して、現実空間にいる私たちが目的をもってインターネットで情報を集めなくても、その時の状況に応じて必要な情報が提供される社会をつくるのがめざされている。人間が介在することなく、モノ同士が結びついて何かを生み出す (IoT) ということにもなる。たとえば、車の自動運転は、自動車と人工衛星、周りの障害物など、モノ同士が結びついて安全な運転がなされる。また、その人の生活パターンを詳細に分析して判断する人工知能 (AI) が、家電に指示を出して快適な生活環境を整えてくれる。

このようなことが大学や研究機関、企業で研究されているが、そこでは多くの科学技術を組み合わせることが不可欠となっている。しかし、日本の研究はとかく従

来の研究領域に閉じこもって、その高度化をめざす傾向が強いと言われている。このような状況を打破して、それぞれの分野が蓄積してきた科学技術をしっかり受け継ぎながら、他分野の研究と対話ができる人材を育成することがこれからの課題となっている。

このように考えると、ワールド・ワイド・ラーニング (WWL) の中身もはっきりしてくる。高校を卒業した後、自分の専門分野の高度な知見を身につけるだけでなく、他分野の知見とすり合わせる能力が求められるのである。そして海外にすすんだ知見があるのなら、その人と積極的に交流することが求められるのである。

本校では2006年からSSHに取り組んできたが、その間に科学技術のあり方が冒頭のように大きく変わった。そのことも意識して、本校では卒業生がそのような高度な科学技術を担えるように、協同的に学ぶことや世界と交流する取り組みを行ってきた。また、課題研究を通して、複数の科学に目を向けることもめざしてきた。その成果をWWLに引きついで花開かせることが求められている。